ビッグ・アイ　コミュニケーション情報紙

i-CO あいこ

BiG-i Communication Paper

The title of our information paper “i-co” is pronounced the same as the Japanese word “aiko,” which means here an equal relationship where no one wins or loses. The purpose of this free paper is to offer useful information for everyone, with and without disabilities, with the motto of “Sharing and Caring.”

2015 July vol.19

「あいこ」は、勝ちも負けもない対等な関係を表す言葉です。「あいこ」は、この分かち合いの精神で、障がいのある人ない人にかかわらずお役に立つ情報を発信します。

i-feature

©成田直茂

Project i

見えない人に舞台を届けるために。

近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻

舞台芸術専攻の3年生。今回のミュージカルでは、日本語セリフの読み上げを担当。演技やダンスのほか、舞台演出や音響を学ぶさまざまなメンバーが集まっている。

因野 利樹（いんの としき）
マット役

三谷 進介（みたに しんすけ）
エル・ガヨ役

為 省吾（ため しょうご）
ベロミー、モーティマー役

神田 あゆむ（かんだ あゆむ）
ルイザ役

中村 友郁（なかむら ともふみ）
ハックルビー、ヘンリー役

久保 絢香（くぼ あやか）
日本語版制作協力

吉富 順子（よしとみ じゅんこ）・・・状況放送
司会、ナレーター、音声解説者。ビッグ・アイが主催する舞台で視覚障がい者を対象とした状況放送を担当している。舞台の情景や役者の服装、動きなどを音声を通して視覚障がい者に伝えている。

阪本 洋三（さかもと ひろみ）・・・日本語版演出協力／日本語台本監修
近畿大学文芸学部教授。日本語版の演出とともに、日本語台本の監修も担当。翻訳会社によって日本語に訳された台本に、「舞台上の演技のテンポに合うように整える」「聞きづらい言葉やイメージしにくい言葉を改める」といった修正を加え、上演台本を作成した。

誰もが舞台を鑑賞できるよう、さまざまな鑑賞サポートに取り組んでいるビッグ・アイ。
今回は「英語で上演されるミュージカルを、目が見えない方に届ける」という大きな課題に取り組みました。
ミュージカルは、音楽が聴こえれば見えなくても楽しむことは可能です。しかし、英語がわからなければ、
ストーリーを追ったり、セリフがもたらすおもしろさを十分に楽しむことはできません。
そこで今回は、舞台上の演技に合わせながら日本語のセリフを読み上げるとともに、
そのセリフの合間に状況放送を加えるという、これまでに前例のないリアルタイム音声ガイドに挑戦しました。
本当にこれで伝えられるのか…？見えない人にとって本当にいい音声ガイドとは…？
答えの見えない課題に手さぐりで挑んだ人々の、試行錯誤の過程とその想いをご紹介します。

挑戦

鈴木　今回のミュージカル「ファンタスティックス」では、セリフから生まれる、あるいは伝わる人の感情、お芝居の臨場感を感じていただきたいという思いがありましたので、日本語のセリフをただ淡々と読み上げるのではなく、誰か演劇をされている方に役者の声を担当していただけないかと阪本先生に相談させていただきました。役者の演技に合わせて日本語のセリフをあてる、それに状況放送をどうやってミックスさせるか。これは、ビッグ・アイにとっても大きな挑戦だったのですが、近畿大学の皆さんにとっても普段とは違った経験だったと思います。見えない人に伝えるという点で、何か意識したことはありましたか?

因野　セリフを伝えるとか、臨場感を加えるとか、そういうところには個人的に不安は感じなかったんですけど、単純に英語だからというところ…。英語と日本語って長さが違うので、役者の演技に合わせて日本語のセリフを伝えきれるのか、あわて過ぎてセリフにならないんじゃないかって不安はありました。

為　状況放送を担当された吉富さんの台本には、見えない人に舞台の情景や役者の動きを伝えるために、誰が何をしたとか、いろんな情報が書き込まれているんですよ。以前に吉富さんとお話しした時なんですが、吉富さんが「ここはもう削る」と言いながら、その中のいくつかの文章にバツをつけられていたんです。「削っていいんですか？」って質問すると、「見えない方は、耳で聴いたものから小説みたいにイマジネーションを高めて観るから、あまり説明しなくても伝わるかもしれないし、その方が説明し過ぎるよりも情景的には映えるかもしれないから」というようなことをおっしゃったんです。それを聞いた時に、はっとしたんですよ。今までお客さんといえば健常者ばかりだったのですが、今回は緊張してる時の声の震えとか、僕の声からすごく細かな機微までとらえることができる人に向けてやるんだなって。そういった方のためにどうしたらいいのか…、緊張してるのを無理に隠そうとすると、別のところでボロがでちゃうんだろうなとか…。最終的に本番では、「もういいや、声震えてでも、恥かく勢いでやっちゃえ」って、思い切ってやりましたが、そういった考えが僕の中にはありましたね。

神田　ちょっと違う話になるかもしれないのですが、学校で何か芝居をするってなった時に、客席のレイアウトを考える担当でもあるんですよ。ただ、良い客席を作れる環境でなかったりもするので、結構切り捨てたりするんですね。「見えないけどしょうがないか、ちょっと背伸びしてもらおうか」みたいに。今回関わらせていただいて、「どこまででも配慮ってできるんだな」というか、「どこまででも考えていかないといけないんだな」って思ったんです。

私は滑舌は悪くない方だとは思うんですけど、自分の声を録音して聴いてみたりする中で、「本当にこれで伝わるのかな、これで私しゃべれているのかな」って、ゲシュタルト崩壊みたいなのを始めてしまって…。私の声を聴いている人には、英語も聴こえているし、状況放送も重なっているかもしれない。どんなふうに聴こえているんだろうって、最後の最後までずっと不安でした。終演後の交流会の時に、聴いていた人が「すごく良かったよ」って言ってくださって、うれしかったんですけど、まだ出来ることはいっぱいあったんだろうなって思いました。

鈴木　見えない方に伝えるということに、何か重大な責任を感じたのかな?

神田　伝える手段が言葉しか無いってなった時に、はっきり伝えるために抑揚をおさえて読むべきなのか、役者の演技に合わせてテンションを上げて読んだ方がいいのか、葛藤と言うか、そのバランスの調整は、おそらく全員がセリフを読み上げるその直前までやってたんじゃないかと思います。

呼吸をあわせる

鈴木　近畿大学の皆さんには、本番までの間、1月に開催されたアメリカ公演の映像に合わせて、読み上げの練習をしていただきました。映像を見ながらの練習と、リハーサルや本番で生身の役者の演技に声をあてていくことでは、大きな違いはありましたか？

因野　細々としたところはちょっと違ってたし、動きも良く見たら違うけど、ほとんどそのままだったよね。

為　そのままだった。僕はもっと「全然ちゃうやん!」ってなるのを想定してたから。

三谷　日本語を担当する人どうしのコミュニケー

©成田直茂

ミュージカル「ファンタスティックス」

2015年3月29日（日）
国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）多目的ホール
世界最長のロングランミュージカル「ファンタスティックス（The Fantasticks）」。愛し合う二人の若者ルイザとマット。二人の結婚を望む父親どうしが、恋は障害があるほど燃えるものと考え、隣り合う家の境に大きな壁を建ててしまったことから物語は始まる。

劇団「ファマリー（PHAMALY）」

アメリカのコロラド州デンバーを拠点に活動するミュージカル劇団。舞台に立つキャストは全て障がい者で構成されている。公演ごとにオーディションを行い、良質な舞台を提供している。

2.24 TUE　プロジェクト始動

近畿大学の学生と阪本先生、吉富さん、制作の株式会社リアライズ、ビッグ・アイの担当者が集まり、打合せを行った。当日の朝に完成したばかりの台本が手渡され、「日本語のセリフは英語の後追いとするか」「英語とタイミングが合わず、日本語どうしの会話が成立しない場合はどうするか」「歌のパートでは日本語訳を読み上げるのか」など、基本的なルールが検討された。本番まで残り1ヶ月という中での始まりだった。

3.2 MON 映像での練習

映像に合わせながらセリフの練習をする学生たち。他の人の声を聴きながら、画面の中の役者の動きに合わせてセリフを発しなければならず、まだたどたどしさが感じられた。少しの違いで印象が変わるアクセントの位置や声のトーンにも気をつけながら、繰り返し繰り返し練習は続けられた。

3.23 MON ファマリー来日

3.27 FRI 初顔合わせ

ファマリーのキャストとのセリフの読み合わせが行われた。タイミングよく繰り出される学生たちの声の演技にファマリーの人々もびっくり。もちろんこのリハーサルはファマリーの協力なしには成立しなかった。良いものを届けたいという想いは皆同じである。

ションと、自分が声を担当する役者さんの演技と呼吸をあわせること。その2つのことを同時に意識しなければいけないんですよね。より確実にそれぞれの役に入っていくための基礎を作るものとして、映像での練習は、すごく大きな意味を持っていたのかなと思います。

因野　映像での練習もよかったけど、初めてファマリーの方と顔合わせした時に、お互いにセリフの読み合わせをしたじゃないですか。あれをやって良かったなって。

中村　映像と若干のスピードの誤差もあったけど、あれは楽しかった。

因野　どこで速くなるか？とか、どういう気持ちで言ってるのかって、映像だけではわからなかったから。

神田　あれをやってないと、セリフの変更点とか見つけられてなかったしね。

三谷　映像での練習をやったことによって、ある程度僕らも「こうした方がいいんじゃないか」っていう対策を持った状態で顔合わせに臨めたので、ファマリーとの読み合せも有意義にできたんだと思います。

鈴木　その対策っていうのは、言葉の長さのことですか?

三谷　長さもそうですし、言葉の意味とか、どの言葉を選ぶかとか、そういうこと全部です。ビッグ・アイさんにとってもこういった企画は初めてということだったので、僕らから「こうやってみたら?」ってことを提示した方が良いのかもしれないって思ったんです。自分たちの案や意思をちゃんと示した上で、「こうしよう」っていうふうに、いろんなことをあいまいにしたくないっていう思いが強かったんですね。「ここはもうちょっと速く言った方がいいんじゃない?」とか、アドバイスし合いながらできたのも、意識の高い状態でみんなと出来たからかなって思います。

「演じる」こと「伝える」こと

鈴木　言葉の選択ということに関して、阪本先生には日本語台本の監修もしていただきました。翻訳会社に訳していただいた台本を、本当に短い期間で読み上げ用の台本に仕上げていただきましたが、今回、どのようなことをお考えになりましたか？

阪本　セリフの練習をする時間が必要だったから、台本をすぐに仕上げないといけなかったでしょう？だから4日間でとにかく上演台本に近づけて、ほとんど変更しなくてもいいという段階にまで持って行くことが一番大変でしたね。それで、ちょっと考えたんですよね。もう一週間、時間をいただくことができれば、英文そのものを直訳するんじゃなくて、もっと意訳をしてしまって、本当にセリフみたいに聴こえるように短くしてもよかったんじゃないかって。英語と日本語のセリフの尺が合わなくなってもいいのかな？とも思いましたし…。

すごく迷ったのは、舞台上の英語のお芝居と同時に日本語のお芝居が進行しているのがいいのか、英語の意味を伝えるものがいいのか、というところなんです。そのあたりの微妙なところが、僕には初めての体験だったので…。きっちりと訳した台本よりも、読みやすいし聴きやすい訳文なんだけれども、翻訳としては「ちょっとおかしいんじゃないの？」ってなるような、そのギリギリのバランスだったので…。解決できていないところもありますが、手さぐりなりに良いレベルまできたんじゃないかって思います。それでも、本当に見えない人にとってどれがいいのかは、よくわからない…。

鈴木　そうですよね。そもそもどちらが良いかというところでは、同じ視覚障がいの方でも、それぞれに好みが違ってくるかもしれないですよね。

阪本　反対にこの日本語の音声を、健常者を対象としてやるのであれば、話が少し違ってくるのかなって思いましたし、違わないのかなとも思いました。

鈴木　先生がおっしゃるように、見える人にも一緒に聴いていただけるものを作ってもいいのかなって思いました。例えば字幕が見えるといっても漢字が読めない人がいるように、音声によるサポートは、見えない人へのサポートではありますが、そのためだけのものではないってことが、今回よくわかりました。

阪本　今回、日本語の台本を字幕としても表示しましたが、それを観た人から言われたのは、字幕

©成田直茂

が多すぎるということだったんです。映画の字幕のように、そのシーンで起こっていることのエッセンスだけを捉えた短い文章が出ることが字幕というものであると。今回僕らがしゃべっていることを全部字幕にあげたのですが、それではあまりにも情報量が繁雑になってしまって、視覚的にはすごく負担になったというお話でしたので、なるほどと思ったんです。もしそれが聴覚の場合も同じなんだとしたら、セリフを日本語にする際にもっと短くして、シーンの意味だけ分かるものにするってことも重要なのかなって、そのバランスですよね。

鈴木　そのためにも、もっと時間が必要だったってことですよね…。吉富さんは、いかがだったでしょう？状況放送の練習をはじめたのはアメリカ公演の映像をお渡ししてからですよね。

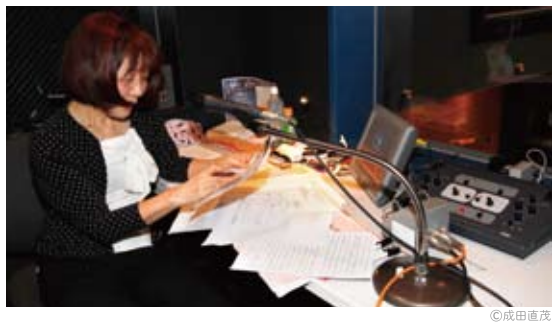
吉富　まずは英語を聴いて、言っていることがわかるところに全部マルをつけていくっていう作業から始めましたね。何回も聴いているうちに、文章の切れ目がわかってくるじゃないですか。実は、本番の前日まで状況放送を日本語に合わせるか、英語に合わせるか悩んでいて…。

鈴木　状況放送を差し込む部分を英語のセリフの間にするか、日本語のセリフの間にするか、ということですか？

吉富　状況放送を舞台上の役者の演技に合わせるのであれば、英語のセリフのすき間に状況放送を差し込むのが普通だと思っていたものですから…。ただ、そこで問題になったのは、「調和」というところなんですね。もし、日本語のセリフと私の解説のタイミングがかぶってしまうと、それを聴いている人が混乱するんじゃないかって。視覚障がいの方に、どういう場面を届けるのか。これが私の本分ですから、聴いている人自身に舞台上の情景を想像していただくことを第一に考えて、最終的には自分の解説の文章量をカットしようって決めました。聴いている人が芝居にすっと入っていけるように、混乱しないようにって思ったんです。

鈴木　芝居を観ている感覚に近づけるってことですね。

吉富　そうですね。本番の当日もギリギリまで状況放送用の台本を修正していたのですが、本番になってからも解説が入れられない部分はカットしていきました。聴いている人にどう伝わるか、本番ではもうそのことしか考えていなかったですね。終演後に視覚障がいの方からお話を聞かせていただいたんですが、いろいろありましたね…意見が。やはり、どの人にとっても良いというものは難しくて、舞台技術や設備の問題もありますし、いろんなものを総合すると良かったのではないかと思うんですが…。



©成田直茂

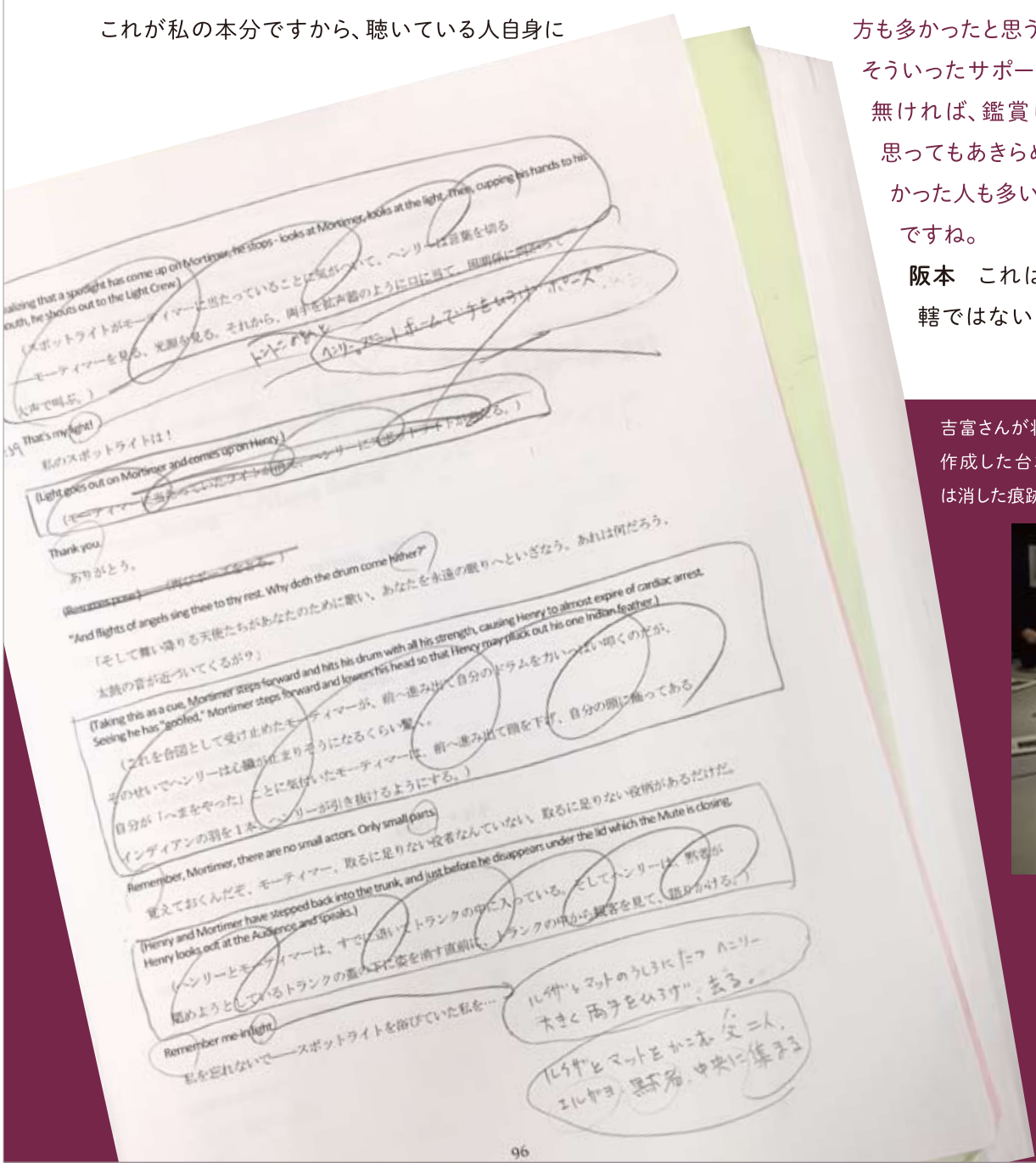
鈴木　状況放送がもっとたくさんあった方がいいと言う人もいれば、少なくてもよかったと言う人もいる。必要のない時にはイヤホンをはずす人もいます。好みの問題というのはありますよね。だからといって何もしないよりは、状況放送があったからこそ、鑑賞に来られた方も多かったと思うんです。そういったサポートが何も無ければ、鑑賞したいと思ってもあきらめて来なかった人も多いと思うんですね。

阪本　これは私の管轄ではないと思っていたことなんですが、ある人に指摘されたのは、吉富さんが書かれている原稿にも目を通しておくべきだったってことなんですね。なぜかというと、登場人物の気持ちや、どうしてこういうことをしたのかという、劇の内容に一歩踏み込んだ情報を吉富さんに提供できていれば、「誰が出てきた」「誰が怒っている」ということだけでなく、ミュージカルの演劇的におもしろい部分を吉富さんに解説してもらえたのではないか？ということなんです。吉富さんとのコミュニケーションが不足していたかなとも思いますが、時間や立場を気にしていたところでもありましたね…。

吉富　ビッグ・アイの舞台では、何度も状況放送を担当していますが、マイクや照明といった音声ブースの環境ひとつをとっても、私一人の力ではなくて、舞台技術の方に提案したり、相談したりして作り上げてきたものなんですね。ただ、今回分かったことは、どういった状況を解説するかという部分においては、やはり孤独な作業だったってことなんです。今回、日本語のセリフを読み上げる人がいて、私の状況放送があるとなった時に、全体を見て「これはどう伝わるのかな」ということが、みんな疑問だったと思うんです。私の中でその整理ができたのは、「聴く人が混乱しないように」という一本の線が定まったからなんですね。日本語のセリフを優先して、状況を加える。入らなければカットする。音声を担当する一人ひとりが、どう考えて全体の調和をはかるかということが、小さなことかもしれませんが、一つの作品を創る上での大きな楽しみかなって思います。

舞台裏

鈴木　久保さんには、キャスティングをはじめ舞台制作におけるさまざまなサポートをしていただきました。ギリギリまでセリフのチェックをしていただいたりもしたのですが、今回の取り組みの中で、久保さん自身、どんなことを考えましたか？



吉富さんが状況放送のために作成した台本。何度も書いては消した痕跡が見える。

3.29 SUN 本番

客席の後方、3階の位置にある音声ガイドブース。ここから舞台の様子を見ながらセリフの読み上げや状況放送を行っている。音声は音声受信用のレシーバー（事前希望者に貸出）を通して、客席の人に届けられる。

久保　普段と違うなって思ったのは、台本との関わり方ですね。お芝居をする時は、「台本に忠実に」というのが基本にあると思うんですが、今回の場合は「これでは見えない人が困るんじゃないか」っていう部分を、練習する中でどんどん変えていったんですね。ただ人が書いたものを読むのではなく、自分たちが変えていった文章でもあるので、一文一文に対する責任を強く感じました。音は同じでも意味が違う言葉があったり、普段聞くことのない言葉だったら、イメージしにくいんじゃないかとか、常にそういったことをみんなで話し合いながら練習していたので、無意識のうちにみんな「見えない人に向けて」ということを考えていたんじゃないかって思います。

鈴木　声を担当するキャストとしてではなく、舞台制作のスタッフとして、何か困ったことなどはありませんでしたか？

久保　いえいえ…。忙しくされている皆さんの中で、「私、何してるんだろう？」って思っていたので、「台本に修正を書き込んでおいて」と言われた時には、「やった、仕事もらえた！」ってうれしかったぐらいなんです。何度も何度も舞台を見せていただいて、何ていいポジションなんだと思ってました。

吉富　音声受信用のレシーバーで音声を聴いて、日本語ガイドがどう聴こえるかをチェックしてくれていたんですよね。あれは大きな役目だったと思います。確認しておかないと、本番で聴こえにくかったり、うるさく感じられることもありますから。

三谷　台本をめくる音が結構入ってしまうということで、音響の方にマイクを調整していただきましたよね。やはり客観的に確認してくれる人って大事ですよね。

吉富　それに舞台技術さんもね、ギリギリの時に短時間でパッと変えてくれたでしょ?

久保　技術さんも「おお、マジか」みたいな顔をしつつも最大限に応えてくださって、「もうあきらめてください」ではなくて、ギリギリまで「何とかならないか」ってことを、どこの部門の方もやっておられたので、すごく良い現場だなって思いました。

意識

鈴木　今回、ミュージカルを上演した劇団「ファマリー」は、キャスト全員が障がいのある方なのですが、ファマリーの皆さんと交流する中で、どんな印象を受けましたか？

神田　障がいが無いように見えるという訳ではないんですけど、それをものともしないというか…。「障がいがあるのに頑張ってる」っていうふうに見えるものではない…。もちろん歩いているのを見ると、「足をひきずっているな」って思ったりはするんですけど、そういうところを隠そうとか、「障がいを持ちながらやってます」みたいなことを押し出そうというところもなく、あたりまえのように演じられているなって思って…。「障がい者が演じてる」なんて意識することもないんですけど、一緒にご飯を食べに行ったら、やっぱりちょっと動きづらいみたいなところが見えてきたりして…。

為　（モーティマーを演じた）スチュアートさんって、彼のキャラクター自体がもう、モーティマーじゃないですか?最初、彼が電動車いすに乗って「わー!」って言いながら舞台に現れたのを観た時、モーティマーは車いすに乗るキャラなんだなって思ったんですよ。ちょっと考え直してから、「いや、違うぞ」って。僕らはあらかじめ障がい者なんだよって聞いていたから分かるんですけど、多分何も知らない人が見たら、モーティマーはこういうキャラクターなんだなって認識すると思うんです。スチュアートさんが普通に立って、歩き回って演じたとしたら、それはそれでモーティマーになるとは思うんですけど、あの彼のキャラクターでしか演じられない味ってあるじゃないですか。それをすごく出していて、足が不自由だとか、そういったことが必ずしもディスアドバンテージじゃないんだなって。不便ではあっても不幸そうじゃないってことをずっと思ってたんです。状況を活かすのがすごく上手な人たちなんだなって圧倒されました。

©成田直茂

三谷　本番前にみんなで手をつないで円陣を組んだ時に、僕らも緊張や不安でいっぱいだったのが、「もうやるしかない」ってなりましたよね。マークが「君たちはもうファマリーのファミリーだ」って言った時にはもう泣きそうになりました。

鈴木　阪本先生には、ファマリーの皆さんと生徒さんたちの様子はどのように映りましたか？

阪本　この企画の大変さをみんなが理解してくれているのかどうかは、本番の一週間くらい前までは不安だったんですよ。それでも急にギアがグンッと入ったような気配があって、途中からは放っておいても自分たちで頑張るようになってたんですね。一緒にセリフの読み合わせをした時に、ファマリーの人がびっくりしてたから、それがこのメンバーにとっても良かったんじゃないかって思います。最初にあのリハーサルをぜひ入れてほしいと言ったのは、一緒に読むことで意気投合してほしいという思いもあったんですけど、これをしなければ、日本語の音声はこちらが勝手にやっている作業であって、日本語で聴いていただくということがどういうものか、ファマリーの方にはあまり分かってもらえないんじゃないかって思ったからなんです。結果的にはあのリハーサルが良いターニングポイントになったんだと思います。

©成田直茂

吉富さんが使用した2つのヘッドフォン。「英語」と書かれたものからは舞台上の声が、「日本語」と書かれたものからは近大生が読み上げる日本語のセリフが聴こえるようになっている。本番の前後と本番中とで2つのヘッドフォンを使い分け、状況放送を行った。

本番まで何度も行われた打ち合せ。

少し緊張気味…?

本番前 ——

本番前のバックステージ。円陣の中からかけられるマークの言葉に全員の胸が熱くなる。

壁を越えて

鈴木　今回、「見えない人にどう伝えるか」を課題として、この日本語音声に挑戦しましたが、実はもう一つの目的と言いますか、何かのきっかけになればいいなと考えていたことがあるんです。それは、障がいのある人の中にも、私たちと同じように舞台を鑑賞することや、舞台の上で表現する機会を求めている人が、実はこんなにもたくさんいるんだってことを、実際に舞台を制作していく中で皆さんに実感してもらいたいということだったんです。皆さんが舞台をつくる時であったり、社会に出て仕事をする時に、これまで見えていなかった人が見えてくるようになればいいなって思いが、私の中にあったんですね。だから、先ほどの意見にあったように、障がい者が演じてるからすごいということではなくて、障がいとは関係なく、モーティマーが車いすに乗った一つのキャラクターとして舞台の上に存在しているって思ってもらえたことが、すごく良かったなって思ってるんです。
それでは最後になりますが、今回のミュージカル「ファンタスティックス」には「壁」というものが、試練や障害であったり、今の私たちを形づくる不可欠な要素のメタファー（暗喩）として登場しました。エル・ガヨのセリフの中にも「壁は残しなさい。いつでも壁はあった方がいいから」という言葉がありましたが、みなさんにとって「壁」とは何でしょうか？

中村　他人との「相違点」と言うか、違うところが全部壁なんじゃないかって思うんです。まず性別があるじゃないですか、そこがまず一つの壁だと思うんですよ。国籍だとか年齢とか、育ってきた環境も考え方も。人と関わる時点で何かしらの壁はあって、なくなることはないんじゃないかって思ったんです。もちろんあった方が良いとは思いますし、それを低くすることはできるけど、ゼロにはならないだろうなって思います。

因野　今回の場合、「海外の役者さんなの？」「プロの演技に声を？」って思った瞬間に、壁があったんですよね。ある意味、「不安」と「恐怖」ですよね。ただ、その壁を崩していった先に見える、何か新しいものにこそ価値があるんじゃないかって思います。

鈴木　吉富さんにとっては何でしょうか？

吉富　今回、このミュージカルに視覚障がいのある知り合いの方に来てもらおうと思ったんです。自分ではお迎えに行けないってなった時に、お迎えを健常者に頼んだ方がいいのではと思いつつ、結局は視覚障がいの方にお願いしたんですね。そうしたらその方が自分で連絡を取り合って、行き方も調整して、ビッグ・アイまで来られたんですね。障がい者の方と接する機会は多いので、「障がい者はこうだ」みたいな思い込みは無いと思っていたんですが、やっぱり思い込んでいたところがあったんですね。だから、越えていく壁っていうものは無限にあるんだなって、今回本当に確信させていただきました。

鈴木　阪本先生はいかがですか？

阪本　やっぱり「理解」は100%じゃないってことなんだと思います。「理解する」ということは、「誤解」のレベルを下げていって、100%に近づいていくことであると。「相違点」や「偏見」、「不安」。そういったものをチャレンジの対象にして、自分がそれを克服していくこと。「壁」というのは、そういうことを象徴した言葉なのかなと思いますね。

鈴木　皆さんにとっては、今回日本語のキャストとして演じたことも一つの壁だったと思うんですが、越える前と越えた後では何か変わりましたか？

神田　壁を越えて新しいところにというよりは、ちょっと原点回帰みたいな感じです。今回舞台制作のお仕事を近くで見させていただいたんですが、全員がこの「ファンタスティックス」を良いものにしようとしているっていうことが見えた時に、やっぱりそこが一番大事なんだろうなって思ったんです。どうしても大学で2年も3年も舞台に携わっていると、何かずるくなると言いますか、偏ってしまっているところもあったんだなって。もっと純粋に頑張ると言うか、純粋にいいものを創ろうとしていかないといけないんだなってことを思いました。

鈴木　今回の取り組みを通して、私たちビッグ・アイにとっての課題もたくさん見えてくるようになりました。もちろん準備期間が短かったことが一番の反省点ですが、時間がないからといってあきらめるのではなく、どうにかできないかと課題に向き合ったことが、みなさんとの出会いにつながったんだと思います。音声ガイドの方法についても、どういうかたちがいいのか、これからいろんな意見が出てくると思います。さまざまな壁と向き合いながら、一つひとつ壁を低くして、多くの人が一緒に楽しめる舞台のあり方を示すことができればと考えています。今回は、本当にありがとうございました。

3.29 SUN プロジェクト完遂

©成田直茂

©成田直茂

©成田直茂

Exhibition

ビッグ・アイ アートプロジェクト 入選作品展

共振×響心 静なる熱情

ごみを集める男／ホセ=マリア・ロメロ・ブレーダ（スペイン）

2014年度入選作品展の大阪会場が
多目的空間DiA ROOMに決定しました！
心に迫る50点の作品をぜひお楽しみください。

会場　多目的空間DiA ROOM（ディアモール大阪内）
　　大阪市北区梅田1丁目大阪駅前 ダイヤモンド地下街
会期　2015年8月4日（火）～8月9日（日）
時間　10:00～21:00（最終日は19:00まで）

主催：国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）　協力：ディアモール大阪

Bunkamura Box Gallery（東京会場）での様子

INFORMATION!

ビッグ・アイ アートプロジェクト
作品募集2015

ビッグ・アイ アートプロジェクトでは、2015年度も作品募集を行います。なんと今年度の入選作品は、大阪・東京・横浜に加え、金沢21世紀美術館と香港でも展覧会の開催を予定しています！ぜひ、あなたの作品をご応募ください。

明日がもっとワクワクする

©FR/LAME MONGER・BARON UEDA

募集受付期間
2015年8月31日（月）～9月30日（水）
応募方法については、下記までお問合せいただくか、ビッグ・アイ ホームページをご確認ください。

問合せ　ビッグ・アイ「アートプロジェクト」係　TEL 072-290-0962　FAX 072-290-0972　Eメール museum@big-i.jp　ホームページ　http://big-i.jp/　ビッグ・アイ　検索

Program

知的、発達障がい児（者）にむけての劇場体験プログラム

劇場って楽しい！！

National Institution For Youth Education 独立行政法人 国立青少年教育振興機構
「子どもゆめ基金助成活動」

舞台やコンサートを鑑賞したいけど、子どもが騒いだりしないか心配…。
そんなお母さんやお父さん、支援者の声に応え、
知的、発達障がい児（者）を対象とした劇場体験プログラムを開催します。
どうして大きな音でブザーがなるの？どうして暗いの？
こたえがわかれば劇場はきっと楽しい！

第1回　9月13日（日）　映画体験「ひつじのショーン」（予定）
第2回　10月18日（日）　コンサート体験「音のつぶコンサート」
第3回　11月8日（日）　オペラ体験「晴ちゃんのおもしろオペラ」

申込締切 2015年8月21日（金）

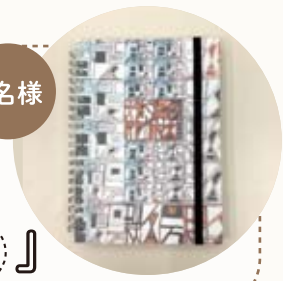
主催：共に生きる地域の“絆”プロジェクト委員会　協力：全国手をつなぐ育成会連合会
詳しくは、下記までお問合せいただくか、ビッグ・アイ ホームページをご確認ください。

問合せ　ビッグ・アイ「劇場体験」係
TEL 072-290-0962　FAX 072-290-0972
Eメール geki@big-i.jp　ホームページ http://big-i.jp/　ビッグ・アイ　検索

Present!

プレゼントクイズ

ビッグ・アイ アートプロジェクト
オリジナルノート&ポストカードセットを
5名様にプレゼント！！



5名様

今号の特集記事からの出題です

Q 劇団ファマリーがビッグ・アイで上演した
ミュージカルの演目は何でしょうか？

『○○○○○○○○○○』

■応募方法
クイズの答えと下記の必要事項をご記入の上、ハガキ、ファックス、Eメールのいずれかでご応募ください。
①氏名（ふりがな）②郵便番号 ③住所 ④電話番号
⑤本紙へのご感想やご希望、ご質問など
正解者の中から抽選で5名様に景品を発送させていただきます。
当選者の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。
※読者のみなさまからいただいたご意見を「i-co」紙面でご紹介する場合があります。予めご了承ください。

■応募締切
2015年7月31日（金）消印有効

■応募先
〒590-0115
大阪府堺市南区茶山台1-8-1
ビッグ・アイ「i-coプレゼント」係
FAX 072-290-0972
Eメール i-co@big-i.jp

個人情報の取り扱いについて…ご応募の際にお預かりする個人情報については、個人情報保護関係法令を遵守し、本紙の運営・実施の目的以外には使用いたしません。

EVENT CALENDAR

情報保障等のアイコン表示
手話　点字　音声ガイド　音声補聴　要約筆記　日本語同時通訳

8 August

4日[火]～9日[日] 各日10:00～21:00（最終日は19:00まで）

ビッグ・アイ アートプロジェクト
入選作品展　共振×響心
▶場所：多目的空間DiA ROOM（ディアモール大阪内）▶無料
▶問合せ　アートプロジェクト係　072-290-0962

15日[土] 13:00～ 16日[日] 16:30

ビッグ・アイ アートキャンプ（子どもゆめ基金助成活動）
▶講師：水野浩世（ユウの家 絵画講師）
　　原　千草（ものをつくることのこと。造形作家）
　　日垣雄一（YELLOW）
▶場所：ビッグ・アイ研修室ほか
▶料金：7,000円／人　※小学生以下は6,500円／人
▶申込締切：7月17日（金）
▶定員：30名（抽選）
▶問合せ　アートキャンプ係
　　072-290-0962

9 September

13日[日] 13:00～14:00

知的、発達障がい児（者）にむけての劇場体験プログラム
劇場って楽しい！！（子どもゆめ基金助成活動）
映画体験「ひつじのショーン」（予定）
▶場所：ビッグ・アイ多目的ホール▶無料
▶申込締切：8月21日（金）▶定員：300名（先着順）
▶問合せ　劇場体験係　072-290-0962

19日[土]・20日[日]・21日[月・祝]
各日13:00～16:30（予定）

大阪府障がい者芸術・文化フェスタ2015
▶出演：障がい者アーティスト33組（予定）
▶場所：ビッグ・アイ多目的ホール
▶無料▶定員：1,200名
▶問合せ　フェスタ係　072-290-0962

各事業の情報保障の詳細についてはお問合せいただくか、
ビッグ・アイ ホームページにてご確認ください。

ビッグ・アイ　フロント通信

館内に優しい香りを

ビッグ・アイにアロマの香りを導入しました。

いつもご利用いただき、ありがとうございます。国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）では、4月より館内にアロマの香りを導入しております。忙しい日常にホッとする安らぎの時間をご提供することができればと考え、株式会社リングライト様とオリジナルの香りを開発いたしました。

「レモン」「オレンジ」「グリーンマンダリン」「ラベンダー」の4つのキーワードをふまえて開発された香りは「リフレッシュ」を目的にしたビッグ・アイだけのオリジナルの香りです。

現在、1階フロアにてこの香りを使用しておりますが、ご来館の皆さまにもご好評をいただいており、スタッフ一同うれしく思っております。

今後もアロマの香りを採り入れ「リラックスできる環境」をつくりだしていきます。
どうぞ香りをお楽しみくださいますように、ご来館を心よりお待ちしております。

Ringlight Inc

ホテル

ビッグ・アイの宿泊室でゆったりくつろぎの時を。

ビッグ・アイの宿泊室は、ユニバーサルデザインに基づき設計されたすべての人にやさしい宿泊室です。大阪市内や堺のまちにもアクセスしやすいビッグ・アイ。
まだ利用されたことのない方も、ぜひ一度ご来館ください。

【宿泊料金】
大人6,000円～／人　障がい者4,800円～／人
【交通アクセス】
泉北高速鉄道「泉ケ丘」駅より約200m

車いすも転回できるゆったりとした宿泊室。
窓の外には緑が広がります。

天井走行昇降リフト設置の宿泊室（5室）には
リクライニングベッドも完備。

レストラン

レストランぐらん・じゅの取り組みをご紹介します。

地域とコラボ！

SAKAI 堺のめぐみ

地元でとれた安心・安全な食材を一部のメニューで使用しています。
ぜひ堺のおいしい食材をご賞味ください。

食のバリアフリー

あいーと

レストランぐらん・じゅでは、噛む力の弱い方や、やわらかい食事を好まれる方々への摂食支援食「優食」を提供しております。ご家族、友人、気のあうグループと、レストランでの外食をお楽しみください。

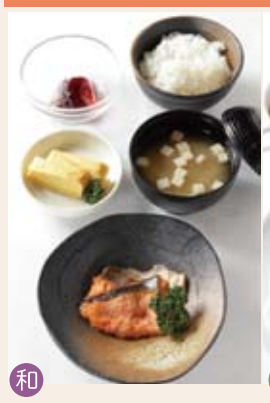
CAMPUS GREENS OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

堺市が認定する農産物ブランド「堺のめぐみ」に登録された「学園菜」（大阪府立大学産レタス）を洋朝食と一部のメニューでご提供しています。

ヨシダファーム
YOSHIDA FARM

堺で唯一の養鶏場「ヨシダファーム」の卵を和朝食でご提供しています。「堺のめぐみ」認定申請中。

モーニングセット



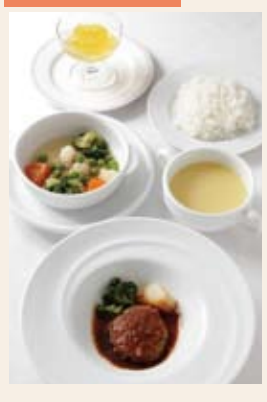
和

洋

1,000円　オーダー　7:00～9:00

和食（銀鮭の塩焼き／だし巻き卵／味噌汁）又は洋食（鶏とじゃが芋のバター醤油／スクランブルエッグ／スープ）のいずれかに、ごはん又はおかゆ／ひとくちデザートをセット。

優食セット



ハンバーグ

牛肉の赤ワイン煮

ホタテ貝のガーリック焼き

彩り野菜のコンソメ煮

1,500円～　オーダー　11:30～20:30

主菜（ハンバーグ／牛肉の赤ワイン煮＋100円／ホタテ貝のガーリック焼き＋100円／のいずれか）に、彩り野菜のコンソメ煮／本日のスープ／ごはん又はおかゆをセット。おまかせデザート&ドリンクバーは＋300円。

※混雑等により、多少のお時間をいただく場合がございます。団体でのご利用の場合は、お席に限りがございますので、一度お問合せください。
※無理せず食べきっていただけるように、量はひかえめに設定しております（例えばハンバーグは50gです）。

ビッグ・アイ BiG-i 国際障害者交流センター International Communication Center for Persons with Disabilities

編集・発行　国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）広報
〒590-0115　大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL 072-290-0962　FAX 072-290-0972
発　行　日　2015年6月30日

上記の記事に関する問合せは　ビッグ・アイ フロントまで
TEL072-290-0900　FAX072-290-0920
Eメール front@big-i.jp